



順序の日

早朝の床は炎天下の砂浜と同じで、素足では歩けない。

おれは床に触れないように注意を払いつつ、布団の縁からスリッパに足を滑り込ませる。そして、まず真っ先に暖房。それから照明、コーヒーマーカー、炊飯器の横に置かれた小型ラジオの電源を入れる。口で息を吸うと喉も肺も凍りつくような気がするから、自然と鼻で吸い、マラソン選手のようにふっふつと刻んで吐き出す。そのやり方は子供の頃から身につけていた。

窓外の景色がほのかに青白いのは、夜の間降り積もった雪のせいだ。

秋田地方気象台がラジオで、「本日の最低・最高気温」と共に「積雪量」を独房に響くような声で告げる。一昨日の晩に六〇センチ、昨晚に九十一センチの積雪があった。海岸付近の平野部は通常であれば降雪が少ない地域であるのだが、上空に猛烈な寒気が入ることにより時折一気に雪が降る。里雪、ドカ雪と呼ばれるものだ。

予報を聞いてしまったことにより、寒さがさらに増した気がした。

「今日は掃除をする日」

食パン二枚をトースターに入れながら、わざと声に出してみると、冷えた身体にわずかな火がともった。

ふた月前から決めていたことだ。

「あらら。えれえ早起きだごど」

食後のコーヒを淹れていると、母が物置きからポリバケツをふたつ運んできた。

その中にある掃除用具一式を居間の座卓に並べる。雑巾、洗剤、新聞紙、ビニール手袋にT字型ワイパー。先端に手ぬぐいらしき布を巻きつけた五十センチほどの棒、、、その使い道は想像がつかない。

「せば私、一階からやってくから。ミツヤは……」

割烹着に袖を通す動作の流れで、母は上を指差した。と同時に、おれも頷く。はなからそのつもりだった。二階にはおれの部屋と妻の部屋がある。四十も近いのに母親に部屋を掃除してもらうつもりはない。

「雑巾、使ったやつは洗濯機入れておいて。後でまとめて洗うがら」

「わかった」

平日は授業、土日はクラブ活動の顧問と忙しく、家の事はまるきり母任せであったから、掃除自体が久しぶりだった。

妻の部屋は、まず物が散乱していた。掃除機をかけようにも、カーペットの生地が露出している箇所が見当たらない。

とりあえず、机と鏡台以外を廊下に出すことから始めた。

文庫本に雑誌、主にジブリ映画が焼かれたDVD、仕舞いそびれた扇風機、貯金箱三つ。裁縫キット、化粧道具、湯たんぽ、生徒から送られた寄せ書きの色紙。犬だか豚だか判別のつかない汚れたぬいぐるみ、割れたカセットテープ、コードの束、ゼリーのカップ。それらのあきらかにゴミにしか見えないものも念のため、捨てずにおく。

道端で目についた物を拾ってくるのは、チヒロが泥酔したときの癖だった。

物をどけて幾らかすすきりしたカーペットに掃除機をかけていると、ハルが足にまとわりついてきた。

白黒ブチの雄猫で、鼻のところに墨を落としたような徴がある。飛びかかっては離れ、一旦おとなしくなったかと思いきや、尻をうずうずさせて間合いをはかり、はっけよいと相撲をとるようにまた飛びかかってくる彼は、とりわけ厄介な拾得物である。

当時はまだ炬燵の足にも満たない背丈だった。野良の時代の体験が影響しているのか、無防備に腹をかかせている最中も、咳払いひとつでびくんとなって部屋の隅に逃げていくほど臆病だったが、近頃では高校球児の背負っているボストンバック並みの胴体を揺らして我が物顔で家中をうろついては、元々ぼろい家の壁や柱に傷を増やしている。

「外で迷子になったら困るから、家から出ないように見張ってて」と口酸っぱく言っていた彼女のほうが、ハルの成長を見届けることなく居なくなってしまった。

コルクボードにピンで留められたメモに、本のタイトルが走り書きしてある。

メモは実際に買うためではなく、市立図書館の「新刊リクエスト用紙」に書き込むためのものだった。

読書家だったチヒロは、しばしば読み終えた小説の面白さについて熱っぽく語った。その語り口は堂に入っていて、その内容は物語の魅力のみならず、技法の革新性や文学史における位置づけから、作者の思想の美点へと至る。また、彼女は本文中の一行を抜粋して、そこからさまざまな意味を読みとってみせた。その話しぶりは淀みなくあざやかで、聞いている側をマジックショーでも観ているような気分させた。

「是非読んでみて」と決まって締め括られるのだが、おれはそのショーだけで十二分に満足してしまうのだった。予告編があまりに完璧すぎて、幻滅をおそれて映画本編を観たくなくなる感覚にそれはよく似ていた。

チヒロが卒倒したのは、市立図書館のフロアだった。

「お金入れたのに、ジュース、出てこないのよ」「人のこと、ばかにして」「機械のくせに」「この」「すかたん」

金切り声を上げながら殴り蹴っていたのは、自販機ではなく「F 501～601 民俗・冠婚葬祭」の書架であった。

連絡を受けて駆けつけた母によると、救急隊員に囲まれた彼女は白い喉を天井に向け、長い髪を床にぴったりつけて、鯉のように口を開閉していたという。酒臭さよりも吐き出した胃液の餛

えた臭いがあたりに立ちこめていた。

手に小銭はなく、代わりに「リクエスト用紙」が握られていた。そこに書かれていたのは、有名SF作家の新刊三冊と、「手軽に糖質オフダイエット」「余った餅の活用レシピ」「武者小路実篤詩集」「漁師たちに愛された猫・ねろ日記」「妊娠体質になる！ 子宝ヨガ」「こころ」。欄外どころか裏面に渡って記載されていて、どう考えてもリクエストし過ぎだった。

チヒロが居なくなって以来、彼女が薦めてくれた本は一冊残らず読破した。目下のところ悩みといえば、次に何を讀んだらいいのか分からないことだ。

大学時代に教職試験を受けるクラスで出会い、交際に発展した。卒業後は二人とも教員としてそれぞれ働いていたが、結婚を機にチヒロは家庭に入った。

見知らぬ土地で一人、専業主婦として生きて行く。仕事さえしていれば、さばけた性格で人当たりもいい彼女のことだから、すぐに友人もできたのだろうが、結婚してしばらくは父の看病で身動きがとれなかった。不満を口にするのはただの一度もなかったが、ひそかに消耗していたに違いない。

また、子供ができにくい体質だったことも、彼女は長く気に病んでいた。母はその心情を察していたわったが、親戚の中には跡継ぎがどうと、種が悪い畑が悪いと、酒の肴のつもりか表立って囃し立てる連中もいた。

「愛想笑いで誤摩化せると思ってんだべ。おめよ」

チヒロが嫁入りした年の大晦日、親戚集まったの宴会が開かれた。

田舎の男たちはとにかく口実を見つけて呑む。冠婚葬祭で呑み同窓会で呑み、正月盆に大晦日、時には初雪が降ったというだけで呑み、また誰かの子供が生まれたと聞きつけては大量の酒瓶を持って向かい、祝辞もそこそこに銚子を傾けるとするのがパターンだった。

この日も座敷で騒いでいるのは男衆ばかりで、女たちは台所でツマミを作り、また食べながら世間話に興じていた。

挨拶がてらお酌をしていた彼女に、叔父が一芸披露を求めた。愛想笑いでやんわり断ろうとすると、平手打ちのような言葉が返ってきた。

「おれだちはな、べつにおめさ嫌がらせしようってんでねえんだ。ただよ、おめは外から来たひとだべよ。もうちょっとおれだちに歩み寄ってもいいでねえの。それともよ、東京のひとはこういうオジサンたちの相手なんて無理、って感じだが？」

野卑な笑い声があがった。

「芸がねえんだば、呑むしかねえな」

別の親戚の一人が、グラスを差し向けた。縁いっぱい地元名産の麦焼酎が注がれている。

チヒロはそれを一息に呑み干した。すると、待ち受けたように拍手が起きた。

それからの彼女はまさに、呑みっぷりを自分の一芸に組み入れ、呑める嫁という名刺を手にとりと親しくなっていた。当時の自分は宴会でのやり取りを母から聞き、彼女のたくましい一面を知ったと、その内面を慮ることもせず、かえって惚れ惚れしていたのだから救い様がない。

芸がないなら呑むしかない。

その一言が原因だったのかといえ、おそらくは違いただろう。さまざまな要因が最悪のバランスとタイミングで重なり合った時、人は発症する。

ただ、チヒロはそのたった一行の「芸」という言葉から、「子供を産む」という意味を汲み取った。それは多分、間違いない。

過ちに気づいたのは、例の猿だかりスだかわからない汚れたぬいぐるみを手にとった時だった

カーペットと床には隅々まで掃除機をかけた。物はすべて元の位置に戻した。が、これから残る本棚に筆筒、鏡台、エアコンに着手するとなれば、必然的に塵埃が落ちてくる。結局、またカーペットが汚れる。

あきらかに順序を間違えていた。

急に肌寒さを覚え、おれはストーブの温度設定を上げた。まくりあげた袖と裾を元に戻し、しばし座り込んで考えてみる。

が、考えなくとも答えはわかっていた。

もう一度、順番どおりにやり直す。それしかなかった。

一番先に手をつけるべきだったのは、天井の照明、その次に棚、それからベッド、カーペット、最後は窓。ふたたび物をすべて廊下に戻し、照明とエアコンの内部を掃除し終えたら、もう昼だった。階段を下りると、母が昼飯をつくっていた。

一階は台所以外、ほとんど片付いていた。廊下は拭き上げられ、風呂場も嫌味なほどつるりと磨かれている。玄関に埃やゴミが集まっているのは、奥にある部屋から順に掃いてきた証拠であった。

思わず、感心してしまった。

うまくいく、というのはつまるところ、正しい順序で行われた、という事なのかもしれない。条件が揃っていたとか運が良かったとか、能力の有無ですらなく。何かを成し遂げた者は順序が正しかった者なのだ。

「何ぼけらっとしてんだ。早えぐ食べれ」

皿の上のまんまるのおむすびを箸でまっぴたつに割りながら、成功者たる母が言った。昼飯は、味噌おむすびとキャベツの味噌汁、漬けものに、昨晚のひじきだった。

「お昼食べたら私、一回買い出しさ行くがら。醤油きれでだし、コンロのボンベも買わなねば。……ああ、あと鱈だ、ざっぱ汁の……」おれに話しかけているというより、自分の頭にメモしているらしい。

「その帰りにチヒロさん、拾ってくるがらな」

箸でつまんだひじきが日差しを受けて光った。

「……もうちょっと遅くてもいいだろ」

「何」

「それじゃ掃除、間に合わないよ」

「何言ってるんだ。もう病院さも伝えであんだから駄目だ。それによ、そなたに馬鹿丁寧に掃除したら、かえって身構えるべ」

「母さんこないだ絆纏買ってただろう。それはいいのかよ」

「それは……たまたまイオンで見つけたんだから、仕方ねえべ。それにあの色、ぜったいチヒロさんさ似合うと思ったんだもの」

「似合うかどうかの話じゃない」

「せば、似合わねっていうんだが？」

母は不服そうにおむすびをほおぼる。まるで話にならなかった。

元々娘が欲しかった、と昔から言っていただけあって、嫁に大甘の姑だった。

だが、家事をこなすなかで何度か衝突した事はあったらしい。詳細まで聞いてはいないが、チヒロもおとなしいようでいて頑固なところがあったので、そのせいだろう。おれと二人きりの時に「ちょっと言い過ぎたかもしれない」と狼狽えて吐露したのは、実は両者だったが、特に母の方は数少ない衝突を引け目に感じたのか、その後の飲酒について忠告を与えることはなかった。

「あの色だば、ぜったい似合う。ぜったいだ」

午後からは自分の部屋を片付け、階段にうつった。その後は廊下に座敷、台所と続く。とにかく、気をつけたのは順序である。ちょっとした塵や汚れに気を配ることよりも、二度手間にならぬように注意した。基本は、上から下。奥から前へ。

ふと居間を見ると、ハルが居た。座卓の上で猫じゃらしをつかんで遊んでいるのはいいが、その周りに白いものが散らかっている。

歌舞伎揚げだった。母は歌舞伎揚げを袋の状態でパンチして、砕いて食べる。掃除の小休止の間につまんで、そのままにしていたところにハルが駆けてきたらしい。

おれはすぐに時計を見る。帰ってくるまで、あと十分くらいだろう。

落ち着け。とにかく正しい順序で事を運ぼう。

一、座卓を起こして壁に立てかける。

二、大ぶりの破片は手で拾い、残りは速やかに掃除機で吸う。

三、畳の目の間に入り込んだものもあるだろうから、それは足裏でさぐって、楊枝でせせる。五分とかからないはずだ。

ハルは掃除機の稼働音に反応して、すぐさまヘッドと蛇腹のホース部分に飛びついてくる。

「こら、誰のせいだと思ってる」

苦情を聞き入れたのか、ハルは一瞬ひるんで目を合わせるも、ゴールテープを切る陸上選手のような格好でまた飛びついてくる。

日が傾いてきた。木々と建物は影絵のようなシルエットに変わり、庭を埋め尽くす雪の色がいつせいに青みを帯びる。

電源コンセントは立てかけた座卓の陰にあった。そこから引いた掃除機のコードが、居間の隅から中央、また隅へと移動してるうちに座卓の足に絡まったらしい。

ぴん、という手応えがあり、振り返った時にはもう動きは始まって、しかもほぼ終わっていた。

座卓は音もなく裏返し、自らの重量に則って、そのアームレスリング選手の肘のような厚みの角を、窓ガラスの左隅に打ちつけた。

ばりん、とレタスを割った時の音と共に、ソフトボール大の穴ができる。穴としては小さいが、そこから広がる蜘蛛の巣状のひびは広い。

正しい順序で対処しよう。

一、まず盥を用意する。

二、水を張って新聞紙を浸し、ふやかしたものを撒く。

三、それを箒で集めて取り除く。

四、新しいガラスを用意する時間はないから、板かビニールか、ダンボールで塞ぐ。急げばぎりぎり間に合う。もはや猶予はない。いつ母が帰ってきてもおかしくない時刻だった。

そこでまた、すくむような感覚が走った。

「……ハル」

ハルは目を鈴のように張って、身をかがめ、尻をふるふるとふるわせている。その挙動には見覚えがあった。猫じゃらしの先に狙いをさだめて、飛びつく寸前の動きだ。目の前には出来たばかりの穴がある。その直径はまさに飛び込むのにちょうどいいサイズで、彼を誘っているかのようだ。

いったいおれは、どこから順序を間違えたのだろう。

よくよく注意していたはずなのに。

横着して座卓を廊下に出さず、壁に立てかけたのがまずかった。いや、座卓くらいそのままにして掃除機をかけるのが正解だった。いや、何よりもまず、掃除を始める前にハルを別室に隔離しておくべきではなかったか。いや、そもそも掃除なんてする意味がなかった。その前に伝えておくべきだった。まず何よりも母に。

チヒロにもまた、話しておくべきことがあった。何を、というわけではないが、面会の時にはろくに会話が續かなかったから。それはそうだ。離婚届をはさんで世間話など出来るはずがない。ただ彼女はそれを受け取った。提出したかどうかは知らない。

順序なら始めから正しくなかった。

いったいおれは、誰を迎えるつもりなんだろう。

実際にそんなことを考えたのは、跳躍するハルを抱きとめる形でおれが、窓ガラスに体当たりした後のことだった。不揃いの破片が庭一面にはじけ、降り注いだ。

うなじと、肩のあたりがなま温い。ハルは窮屈そうに体をよじり、腕から逃れようとする。そ

うはさせるかと力を入れると、指を噛まれた。

「誰のせいだと思ってる」

そんなことは確かめるまでもなかった。散らばった破片は庭にあたらしく積もった雪にまぎれて既に見えず、立ち上がろうにも、どこに手をつくべきなのかわからない。

ハルは胸元でナアナア鳴いて、まもなく疲れ果てたのかフーと勢いのある鼻息をもらし、まるで何年も前から既に決まっていたことみたいに、おれの手首にあごをのせる。

その眠たげな視線の先に、まっすぐな光が走っている。

聞き慣れた軽自動車の排気音が、うっすらと近づいてくる。

順序の日

<http://p.booklog.jp/book/116597>

著者：堀内幸太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/syrup0117/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/116597>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト